

大教大の教科の実態

(当原稿はテーマコラムに即した内容なのだが、締め切りに間に合わなかったのか、掲載を憚ったのか？ 本誌には掲載されていないものである)

或る男がいた。名は特に伏せることにしよう。伏せたところでこの「OH! WOO!!」62万人の読者の半数は知っている人物であるので、読むにつれて誰のことか判って来るだろうが。

男は小学校時代から教職に憧れていた。だから就職状況のことなど考えずに、〇阪教育大に入ってしまった。入ってしまったまもなく、御多分に漏れず彼は五月病にかかってしまった。彼が他の学生と違うところはしっかり学校には来ているにもかかわらず部室でぼお〜とすごしているということだろうか。6月になっても7月になっても夏休みがきて終わっても秋がきて冬がきて春休みになるまで5月病は治らなかった。

3月31日、成績発表である。4教科16単位。これが彼の取得した総単位数であった。「怪人16面相現わる!」「両手両足使わないと単位の計算が出来ない!」周囲の人間のありありとわかる同情の表情を読みながら陽気に振舞う彼ではあった。彼の所属する中学校過程理学科は1回生のみ池田分校で一般教養を行ない、2回生以降は天王寺に移る。これを移籍と言うのだが、彼はイセキでできなかった。7教科以上の単位を取得していないと許可されないのだ。イセキ出来なかった学生は「残留生」と呼ばれた、ここに彼は自分が道を外れたことによるやく気がついたのだが、それでも陽気に「池分残留孤児」などとギャグっていた。

授業の主体は天王寺で実験と概説、天王寺で授業のない日は池田で一般教養、そしてそのあいまにレポートという地獄生活が始まった。天王寺分校の教務のいさんには「こりゃ無理だからもう一年むこう(池田)でやったら。」と冷たいことを言われた。天王寺分校に通う電車の定期券も他分校聴講定期と違って梅田でしか買えないという不便なものであった。しかし彼は負けなかった。前向きに生きようと決意したのだった。

しかし結果は人並のものだった。2回生終了時点で56単位、英語は4つのうち1つしかクリアできていなかった。いまだに一般教養は残っている、概説も落としたものがあつた。しかも次の3回生終了時点までに100単位を取得しないと留年が待っていた。ますます頑張らねば、とりあえず前向きな彼だった。

3回生も実験と概説のあいまを一般教養と英語で埋めるとほとんど空きがなかった。土曜の午後も100単位にするために不必要な授業をとって埋めた。まさに月火水木金金である。